［石狩市］

四季彩の杜をつくる会

［報告者］

（下）森山裕次さん
（上）藤田宏司さん

四季彩の杜（もり）を未来の人々に

都市生活者に休息の場を

林業は「切る産業」と考えられがちですが、私やこの森のオーナーのモットーは「切るのも林業、切らないのも林業」。私は石狩市森林組合の責任者（事務局長）で、組合としては毎年1万立方メートル以上を伐採しています。その一方、経済林とはいえないけれど、将来まで残しておくべき木々を育てていくのも林業じゃないか、という観点で集まった仲間たちと、この活動をしています。

活動場所は、「道民の森」に囲まれた当別町青山奥一番川近辺です。かつて酪農地として開墾された山が長らく放置されていました。ここに、北海道内のどこにもないような、色合いのあるモミジやサクラを中心とする広葉樹の森――「四季彩の杜」――を、今後何世代にもわたって構築していこう、という目標を立てて、平成29年7月に「四季彩の杜をつくる会」を結成しました。約40人の会員には、林業従事者のほか企業経営者、団体役員・職員、大学教授、医師、プロ写真家などがいます。

私たちの夢は、自然とのつながりを失いかけている青少年や、都市生活の中でストレスにさらされている人々に、この「四季彩の杜」を休息の場としてもらうことです。そこで、まずは見通しの良い明るい森を目指しています。森が暗いと、恐ろしいというイメージに結びつきやすいですから。活動当初は、一帯が笹やイタドリに覆われ、その奥はさらにうっそうとして、クマなどの野生動物の痕跡もありました。そういうのをすべてきれいにして、ずーっと先を見渡せる森にしようということです。枯損木の処理・笹刈り・草刈り・イタドリの除去・枝払いなど、すべてこの目的のために実施しています。

広葉樹に徹して植栽

離農跡地に残された古い農機具庫を買い取って、資材置き場兼休憩場所にしています。隔週の日曜日に現地に集合して、年に15回程度の活動をしています。各回の活動参加者はだいたい15人ほどです。作業前には必ずミーティングを開くことを心がけています。メンバーに北海道森林室OBがいますので、指導を受けながら、それぞれ得意分野の作業を手分けして進めています。

最初の1年は、交付金でそろえた新しい機材やヘルメットなどの装備を使って、とにかく草刈り・笹刈りを進めました。

苗木の植栽を始めたのは2年目からです。植栽後の虫害を防ぐために、大阪のメーカーから製品の提供を受け、トウモロコシ由来の原料でつくった防護ネットを利用しています。

路網整備にも取りかかり、これまでに500mを造成しました。2年目の終わりごろには自動車が通れる道になりました。

3年目の今年は、オーナーの意向を受け、この道をサクラ並木にするプランに着手しました。10mの等間隔にパワーショベルで穴を開け、支柱を立てて苗木を植えました。

この3年間でおよそ30haの整備が終わりました。植林は広葉樹に限定し、これまでカエデ・モミジ・サクラ・リンゴ・クリなど数百本を植樹しました。来年度からはイチョウ並木をつくる計画です。

余談ですが、われわれの会員に気球所有者がいます。気球で世界一周をしたこともある冒険家です。「四季彩の杜」がすっかりきれいになってきたので、昨年秋、現地でデモ飛行をすることになりました。当日は強風が吹き荒れて、残念ながら飛べませんでしたが、こういった地域イベントを開催できる環境が生まれつつあります。

今後も継続して、100ha以上ある「杜」をいずれ、秋に葉の色づく樹種でいっぱいにしていきたいと考えています。